

22



樹里安だより

ジュリアン

2007年12月
Vol. 22




— 安行の名所（その九） —

ふるさとの森・赤堀用水沿い斜面林

《川口市大字安行原》

安行中学校東側に位置し、埼玉県では準絶滅危惧種とされている一輪草が自生している。平成7年に行われた安行地区の一斉植物調査で自生が確認され、その後「安行みどりのまちづくり協議会」を中心とした地元の人々の手厚い保護を受け大きな群落になった。平成14年には市指定文化財、天然記念物に指定されている。森は、スダジイ・シラカシなどの常緑樹、コナラ・ケヤキなどの落葉樹、リュウノヒゲ・スミレなどの下草で構成されている。

川口市保存樹木を訪ねて（その22）

安行小学校の アキニレ (川口市安行原2020)

今回は、アキニレを取材するため安行小学校に向かった。県道沿いのケヤキやカエデなどの色づいた葉が少しづつ落ち始め、晩秋の雰囲気を漂わせていた。安行中学校脇の交差点付近は、多くの植木業者が軒を連ねている。この辺りの木と土の出すにおいや街の雰囲気は、初めて訪れた人でも懐かしく感じるのではないか。

安行小学校は、明治6年創立の伝統校でこの地域の方々の多くが通った学校である。アキニレは正門脇に生えていて、一番にお出迎えしてくれた。前もって資料で調べた幹周り2m、樹高16mのイメージよりかなり大きく感じられた。一度、職員室に行って取材の許可をとる。校舎の出入り口から見渡すと校庭脇には様々な樹木が植えられている。特に松には植木の里の小学校だということが納得させられる。また同じ場所から、アキニレを見ると隣にある同じく保存樹木に指定されているクスノキをバックにこんもりとした落ち着きのある表情を見せていて。クスノキの深緑と晩秋の陽光がアキニレの黄葉を美しく浮き上がらせていた。2本でこの学校のシンボルツリーとしての存在感を放っている。戻り取材を始める。正面から、裏側から、下から様々な角度で見てみた。近づいて見るとたくさんの発見がある。

樹皮は鱗片状にはがれ落ち、葉は、まだ黄葉していない緑色の葉が少し交ざっていた。アキニレはアキ(秋)に花や実がつくニレ(榆)なのでこの名前になったそうだ。また別名のイシゲヤキは、材が堅く樹の様子がケヤキに似ているからで、もう一つの別名のカワラゲヤキは、水辺によく生えることが由来している。

卒業生の方とお話しをする機会があり、聞くとこの木に登って、よく遊んだそうだ。きっとこの木の思い出は多くの人にあるのだろう。この木を育て、またこの木に育てられた。

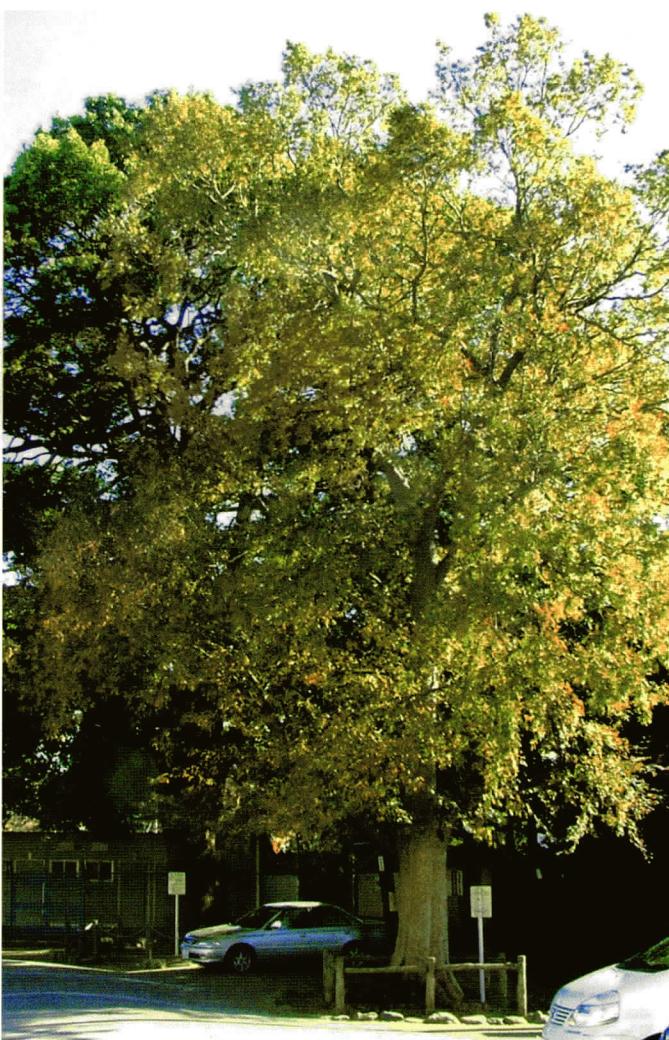
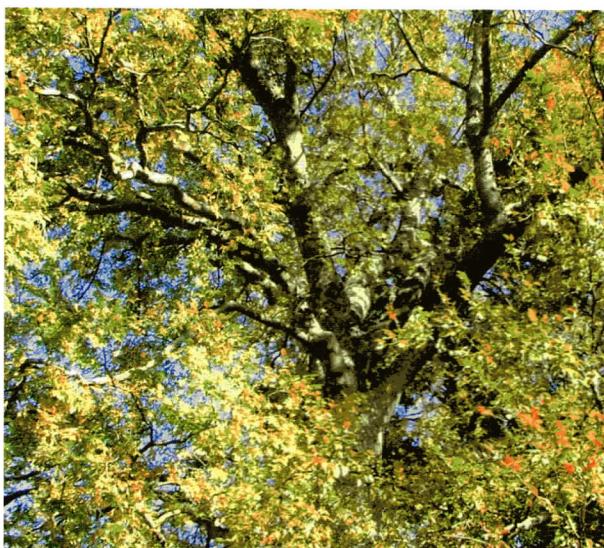


最後に、校門脇でもう一度眺める。入学する時、校門でこのアキニレに出迎えられ、卒業する時は校門でこのアキニレに見送られる。きっと“がんばれ”と言い続けているに違いない。この木は、いつの時代もエールを送り続けているのだ。



アキニレ *Ulmus parvifolia* Jacquin (ニレ科ニレ属)

- 別名 イシゲヤキ カワラゲヤキ
- 分布 本州南中部、四国、九州、台湾、朝鮮、中国
- 高さ 15m 幹周り1.5m～2mぐらいになる落葉広葉高木
- 用途 公園樹、洋風庭園樹、並木用、緑陰樹、景観樹
- 陽樹
- 生長はやや遅い 湿気に強い 潮風に耐える
- 樹皮は灰褐色で、小さな皮目があり、鱗片状にはがれる
- 9月頃、本年枝の葉腋に淡黄色の両性花が束生する
翼果は橢円形で長さ10mm程度で、11月頃淡褐色に熟す 秋に黄葉する



安行小学校の保存樹木

樹種	科名	指定年月日	指定番号	所在	幹周	樹高
アキニレ	ニレ科	H12.9.1	10	安行原2020	2.0m	16.0m
クスノキ	クスノキ科	H12.9.1	11	安行原2020	3.7m	20.0m



推薦植物紹介

クロガネモチ

- 学名：*Ilex rotunda Thunb.*
- 科・属：モチノキ科・モチノキ属
- 原産国：日本、台湾、中国、インドシナ半島の一部
- 結実期：10月～翌年の1月
- 分布：関東地方以西～沖縄まで
- 植栽時期：4月頃 又は 9月頃
- 肥料：2月頃

クロガネモチは高さ10m～15mになる高木の常緑広葉樹であり、若枝や葉柄が赤紫色を帯びることからクロガネ(黒鉄)と言う名前が付けられている。

比較的温暖な地域に分布する樹木なので、あまり寒さには強い植物ではないが大気汚染などへの耐久力があり、都市部における環境への適応力も高い。

幹が直幹(幹が直立する)で枝が水平に張る性質を持ち、刈り込む事で庭木として美しい樹形に仕立て上げることが可能。また、秋頃から雌木(※1)に5mm～8mm程度の赤い実が多数結実する。

(※1) クロガネモチは雌雄異株なので、雌木にのみ結実します。実を観賞する目的で植える場合は、良く結実する樹又は、接ぎ木したものを選定。

《植栽時の利点》

- ① 大気汚染に強く、道路沿いへの植栽も可能。
- ② 赤い実が多数付き、冬の庭に彩りを与える。
- ③ 刈り込む事によって庭木として美しい樹形になる。



(写真1) クロガネモチ（結実）



(写真2) 黄実のクロガネモチ（結実）

記念樹にふさわしい木とそのいわれ（その8）

祝

巣立ちの記念

スギ

スギ科 スギ属（常緑針葉樹・高木・陽樹）

住み慣れた家を離れる巣立ちの希望を込めてスギを植えよう。スギの語源は「直ぐ木」。まっすぐな樹形は、文字通り未来へ向かって進む様子をあらわしてぴったり。明治の学制創設に際して、全国にスギの良材が豊富だったことによる。まっすぐな材質が、未来へ向かう日本の子供たちを支えたのだ。若木は活力に満ち、老木は莊厳といわれるその姿に、人生を重ね合わせて植えたい。



台杉（シロスギ）

1. 特徴

開花期2～3月、結実期10～11月。生長は早い。品種は多数で、その中にはダイスギなどもある。

2. 植えるときの注意

時期 3～4月・9～10月

場所 濡度が高い場所を好む。

3. 管理のポイント

カミキリムシ、キクイムシなどの虫害に気をつける。

《他の木》



ハギ

落葉広葉樹
低木・陽樹



ウメ

落葉広葉樹
小高木・陽樹



ヒメリング

落葉広葉樹
低木・陽樹



アジサイ

落葉広葉樹
低木・中庸樹～陰樹

参考：日本緑化センター 木を植えよう 記念樹にふさわしい木とそのいわれ



椿

ツバキ科 ツバキ属

ツバキの歴史

ツバキは、身近な花です。早春に咲く優雅な姿に魅了された方も多いのではないでしょうか。遙か遠い昔より世界中の人々に愛されてきた花です。

ツバキは古来より日本に自生していました。日本人は、大昔から森や山には神が宿ると信じており、山から木を伐り出す時は、神に許しを乞う儀式を行っておりました。寺社などに神木としてある種の木が大切にされていましたが、ツバキもそうした木の一つとして考えられていたそうです。昔は正月卯日に邪気を払うための卯杖として利用され、正倉院には卯杖が残っています。

椿という漢字は、春を代表する花ということで、日本人が作った字です。中国で椿というと、センダン科のチャンチンを指します。ツバキは、「古事記」や「万葉集」に取り上げられ、既に皇族などに親しまれていたことが確認できます。

戦国時代の武将は、花びらが散るのでなく、花ごと落ちるので、「首から落ちる」といって敬遠していたようです。これに対して後に、西洋人は、花の散り方が見事で「貴族のように美しく散る」と表現したそうです。東洋と西洋では同じ花に対して大部感じ方が違っていたようです。

さて、徳川將軍の時代になり、ツバキは徐々にスポットライトを浴びてきます。徳川2代將軍徳川秀忠は、ツバキをたいへん好みました。また秀忠の近習の永井信濃守尚政は後水尾院にツバキを献上したとされツバキを介して公武の交流が深まった逸話が残っています。また3代家光の頃になると江戸城内に御花畠が作られ、全国で創出された地域ごとの品種が集められ栽培されていたことが江戸図屏風からわかります。

元禄時代には染井村の伊藤伊兵衛が「花壇地錦抄」を出版しました。これは、いわゆる総合園芸書でツバキが205種記載されました。この地錦抄はツバキの栽培技術が記載されており、一般庶民への普及に役立ちました。

現代では、春先にツバキ展が全国各地で開催されています。多種多様なツバキが展示されるので、実際に自分で目にすることができます。その美しい花は、今もなお多くの園芸ファンの心をとらえています。



グリーンセンターの椿展



見沼の春（川口市立グリーンセンターで選抜命名）

ツバキの利用方法

- [椿油] 椿油は、種子を絞った油で、高級食用油・整髪料などに利用されます。古くは、燃料油にも使用されました。
- [木炭] 木炭としても利用され、殿様の手焙りにも使用されました。
- [木灰] 日本酒の醸造には木灰が必要で、ツバキは最適な素材とされていました。
- [材木] 木質が硬く、建築材として利用されてきましたが、現在は、国内の大木は伐採されてしまい現在は利用されていません。また、工芸品、木の判子などに使用されました。
- [茶花] 茶花とは茶室の床に生ける花のことをいいます。花の少ない時期に咲き続けるため茶花として重宝されました。
- [その他] 民間療法として、吐血、下血、鼻血には、花を煎じて服用しました。また刻んだ葉は、トイレの防臭や蛆の発生を防ぐのに使用されました。

世界での日本のツバキ

ヨーロッパで最初に日本のツバキを咲かせたのは、イギリス人です。それは、1738年のことで、その後フランスやベルギーに広まりました。フランスの作家デュマ・フイスの「椿姫」(1848)という物語を作りヴェルディがこれを題材として歌劇を作ったことはよく知られています。日本のツバキは大流行していたのです。

しかし、冷涼なヨーロッパの気候では、うまく根付かず流行は長く続きませんでした。第2次世界大戦後にはアメリカ、オーストラリア、ニュージーランドで流行しました。暖地栽培され、育種が進められ、種間雑種も多く作られるようになりました。

安行のツバキ

江戸幕府お抱えのツバキの生産地は駒込染井でしたが、時代が移り変わり都市計画が進められていくと住宅などに生まれ変わりました。やがて江戸ツバキ生産の系譜は安行に移転しました。現在でも数件のツバキ生産者が活躍しております。また、安行の地で作られたり、命名された種も数多くあります。川口市立グリーンセンターでは毎年3月に「椿展」を開催しており、これらを含めた全国の、世界の椿を展示紹介しています。



一貴山（かずきやま）



木連川（きづれがわ）



京錦（きょうにしき）



肥料（その1）

1. 原料による分類

- ①有機質肥料・・・天然の有機物を原料とした肥料であり、一度土壤中の微生物によって無機物へと分解された後に植物に吸収されます。そのため、速効性に欠けますが、量が多少多くても濃度障害や塩類集積などが起こりにくいとされ、また、微生物を活性化し土壤を改良する等の利点があります。逆に欠点としては独特の臭気や有機物を目当てに虫が発生するなどの問題があります。
- ②無機質肥料・・・無機物を原料とした肥料であり、化学肥料の大部分が含まれます。
※化学肥料自体を意味する場合もあります。
- ③化学肥料・・・化学的に合成された無機質肥料のこと。一般的には速効性があり、有機質肥料に比べ臭気などがなく有効成分の含有量も高くなっています。また、効果を持続させることを目的にコーティングを施した緩効性の肥料などもあります。欠点としては、長期間に渡る使用や多量に使用すると土壤障害が発生することがあります。

2. 肥料効果の遅速による分類

- ①緩効性肥料・・・1度使用するとある程度の期間に渡り効果が持続するタイプの肥料で、化学肥料(コーティングを施した肥料など)が該当します。元肥にも追肥用にも使用します。
- ②速効性肥料・・・基本的には水に溶けやすい成分を使用しており、使用後すぐに植物が吸収し効果が現れるが、持続期間が比較的短く、化学肥料(液体肥料や水溶性の固形肥料など)がこれに該当します。主に追肥として植物の状態を確認しながら使用します。
- ③遅効性肥料・・・肥料を施してから植物に吸収され実際に効果が現れるまで時間が掛かるタイプ。一般的に有機質肥料がこれに該当します。

3. 含有量による分類

- ①単肥・・・1つの養分しか含まない肥料
- ②配合肥料・・・2種類以上の単肥を物理的に混ぜ合わせたもので、3要素(窒素、リン酸、カリ)のうち2成分以上を含む肥料。
- ③化成肥料・・・肥料や肥料の原料等を単に組み合わせたものではなく、化学処理を施したもので、3要素(窒素、リン酸、カリ)のうち2成分以上を含む肥料。
- ④普通化成肥料・・・化成肥料のうち3要素(窒素、リン酸、カリ)の含有量が15%以上で30%未満の製品(低度化成肥料とも言う)。
- ⑤高度化成肥料・・・化成肥料のうち3要素(窒素、リン酸、カリ)の含有量が30%以上の製品。



ジュリアン 樹里安
 川口緑化センター・道の駅「川口・あんぎょう」
 発行日：平成19年12月1日
 発行：財団法人 川口緑化センター
 〒334-0058 川口市安行領家844-2
 TEL 048-296-4021
 ホームページ：<http://www.jurian.or.jp>